様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２１９９

研究課題名（和文）20世紀から現代の欧米圏の動物倫理と日本哲学における「憐れみ」概念の比較研究

研究課題名（英文）A comparative study of the concept of "compassion" in animal ethics among contemporary Western European sphere and Japanese philosophy after the 20th century

研究代表者
鬼頭　葉子（kito, Yoko）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：００７５６５５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、欧米圏の哲学および日本哲学における「「憐れみ」概念を精査した。その結果、現代倫理学・哲学の観点から考えた「憐れみ」は、自他が本質的に傷つきやすさや有限性を共有するがゆえに生じると捉えられる潮流があることが判明した。また日本哲学やキリスト教思想など宗教哲学では、動物と人間との間の差異が問題になるが、その差異とは人間の優位性から生じるのではなく、人間に動物に対するより大きな責任があることに由来するという観点が重要であることを解明できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、動物倫理における「憐れみ」概念に注目することにより、功利主義や動物権利論に基づくこれまでの動物倫理とは異なり、感情主義に基づく動物倫理という新たな領域に光を当てることができた。また動物倫理と宗教哲学との関連性の解明も、これまでの本邦における研究では不十分な側面であり、学術的意義がある。そして文献精査による成果に加え、海外の動物倫理研究者より研究書の分担執筆の依頼を受け、各研究書のテーマに沿った論文を執筆した。動物倫理とツーリズムの問題について、また動物倫理と気候変動についてといったテーマのもとでの研究成果を海外へ発信した。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined the concept of “compassion” in Western philosophy and Japanese philosophy. Results show that there is a tendency that, from the perspective of modern ethics and philosophy, “compassion" is considered to occur because oneself and others are inherently vulnerable and share finiteness. In addition, in religious philosophies such as Japanese philosophy and Christian thought, the difference between animals and humans becomes an issue; however, this difference does not arise in the form of human superiority, but instead, humans have a greater responsibility for animals.

研究分野：哲学、倫理学、宗教哲学

キーワード：動物倫理　憐れみ　動物神学　感情主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の地球規模での生物多様性の毀損や環境持続性に対する危機、グローバル経済下での弱者搾取（人のみならず自然環境や動物もまた搾取対象と考察される）といった課題が注目されるのと軌を一にして、動物倫理研究は年々盛んになっている。国内の動物倫理に関する研究についても、2000 年代以降、哲学、倫理学、社会学、動物行動学、獣医学、農学など様々な分野で活発化している。

また本研究が分析の手がかりとする「憐れみ（compassion／慈悲）」概念は、「共感」とも訳されており、現在欧米圏で隆盛にある「ケアの倫理」や「徳倫理学」における重要な概念である。さらに「憐れみ」概念は、仏教思想においても、衆生を苦悩から救い出す「大悲」や、新約聖書の「善きサマリア人」のたとえ話に象徴される「agapē」を理解するための鍵となる概念である。つまり「憐れみ」概念は、近年の倫理学における議論で重要な位置を占めているだけでなく、宗教的言説との親和性が非常に高く、広範な思想的背景を有しているという特徴がある。研究代表者は、これまで宗教哲学、並びに宗教思想と倫理学との関係について研究を進めてきたが、近年の倫理学および宗教哲学において「憐れみ」概念が人を倫理的行動へと促す動機として再考されていることに着目した。すなわち「憐れみ」概念について、倫理学、宗教学、宗教哲学など学際的な観点から解明する試みは、現況の動物倫理に宗教的視座をも含む思想的深みをもたらし、延いては、日本の思想・文化状況に合致する新たな動物倫理を構築する上でも有効なのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究は、動物倫理の哲学的・宗教的思想背景について、特に「憐れみ（compassion）」概念を鍵として解明することを目的とする。はじめに①20 世紀から現代の欧米における哲学・宗教哲学の思想状況を精査し、動物倫理の背景にある「憐れみ」概念の内容を把握する。次に②日本の仏教思想および京都学派の宗教哲学を分析し、日本独自の「憐れみ（慈悲）」概念の意味内容を抽出する。最後に③日本および欧米の「憐れみ」概念を比較し、「慈悲」概念を組み込んだ日本独自の新たな動物倫理の構築を目指すものである。

３．研究の方法

（１）欧米圏の哲学者、倫理学者、キリスト教神学者による動物倫理に内包される「憐れみ（compassion、Mitleid、agapē）」概念と、彼らの思想の背景にある宗教哲学・宗教思想との関係を解明する。（２）京都学派を中心とした日本の哲学者、倫理学者の「憐れみ（慈悲、大悲）」概念と、彼らの思想の背景にある宗教哲学・宗教思想との関係を解明する。（３）（１）と（２）を比較し、両者の差異と類似性を抽出する。さらに、日本の文化・風土に合致した新たな動物倫理の構築可能性を探る。（４）上記研究を進めるため、研究会を開催する。（５）研究成果を国内・国際学会・国際研究雑誌などで発表する。また海外の研究者と動物倫理に関する共同研究を行い、研究成果を共著として発表する。

４．研究成果

研究成果は以下の５つの内容に大別される。

（１）compassion 概念の思想史的研究

本研究では、「憐れみ」概念について、「あわれむ主体」と「あわれまれる対象」に焦点を当て、古代ギリシアから現代までの思想史的変遷を概観する研究を行った。我々は如何に「あわれ」に思い、誰を「あわれむ」のか。アリストテレスにおいては、あわれむ対象は同胞で あり、あわれに思う動因は「自分も同じ目に遭う可能性」という同一化にあった。デカルト、スピノザ の理性主義においては、あわれみは自己愛や理性的思考の弱さに由来しており、きわめて理性的な人間にとってのみ「あわれみ」は高邁さの表れとして捉えられた。一方彼らの理性主義に対し、ヒュームやアダム・スミスは感情主義を思索の中心とした。ヒュームの「共感」は、他者の思考や感情を認識する手段であり、スミスにおいては、同胞に抱く一体感として位置づけられた。ショーペンハウアーにおいては、感情に基づく道徳的行為を否定するカントを批判しつつ、他者の苦しみを共有することによって自他の壁を超え

るという本質的同一が提唱された。現代哲学・倫理学では、共感的な想像力によって、種の壁をも超え「他者」に動物も含めた思索がなされるようになった。さらに動物という他者へのあわれみは、人間という自己の傷つきやすさや有限性、死すべき運命や受苦性などに基づく「単なる優しさにとどまらない正義の問い」へと展開している。以上のように、あわれみの主体と対象に焦点を合わせ思想史的に評価することで、各思想家の際立った特徴と思 索の歴史的変化を明確に見て取れる。

（２）sympathy 概念の思想史的研究

本研究では、動物倫理における「憐れみ」概念を精査するため、現代欧米圏の文献調査を進めるとともに、sympathy（共感）概念が提唱された古典に遡り、ディヴィッド・ヒュームによる共感概念の解明を行った。「憐れみ」は「共感（sympathy)」概念とも密接な関連をもつことが想定される。ヒュームにおいては、「共感」は「神」を持ち出さなくとも人間が公徳心を持つことは可能だという主張のもとに提唱された概念である。ボイル・レクチャーの講師をつとめたリチャード・ ベントリーは、無神論がイギリス中に行き渡ったら、友情や名誉、忠誠といったあらゆる道徳と決別することになるだろうと述べ、無神論への警鐘を鳴らしている。ハチソンもまた、人間の道徳的な行いが摂理と密接に関連していることを前提とし、人間が慈悲深い神の意匠に頼るのでなければ道徳的行為が不可能であることを指摘している。ヒュームの言う「宗教」においては、摂理が道徳的な規制になることは想定されていない。ヒュームは、他者への道徳や公共の形成過程について、神的摂理（道徳的に振る舞えば来世において報いがある）を持ち出さずに論じ、その代わりに「共感」概念を措定したのである。ヒューム自身が動物への倫理的態度を提唱しているわけではないが、同じ情念を持つ存在として人間と動物は類似していることを指摘している。このように共感という概念は宗教的背景をもとに形成されたことが判明した。

（３）京都学派の哲学における compassion 概念の研究

「憐れみ（compassion)」の概念は、大乗仏教あるいは禅仏教の主要としても知られており、歴史的変遷および多くのヴァリエーションを見出すことができる。本研究では、「憐れみ」概念の禅仏教における展開例として、京都学派の思想家の一人である西谷啓治（1900-1990）の「慈悲（共感)」の概念および「自他不二」と呼ばれる立場を取り上げ、その特徴を明らかにする試みを行った。西谷は禅仏教に基盤を置きつつ、キリスト教思想や 20 世紀の西洋ニヒリズムに対する批判的見解を持ち、それらの問題点、特に二元論的思考を克服しようとした思想家として知られている。西谷は、自然と人間、あるいは人間と動物といった二元論的な枠組みを拒否し、自然も人間も動物も、同じ無常なものであることを受け入れて慈しむ（「もののあわれ」）という共感が生じると主張する。そして西谷は、自然や動物をふくめた生けるものすべてとの真の感応あるいは共感を可能にするものとして、彼独自の「空」の立場を提唱している。西谷によれば、空の立場とは自己執着を破った立場であり、人格の自己中心的な把捉が否定された立場である。このような空は単なる虚無ではなく、絶対無であり、決して単なる対象とはならない。空における人格の自己中心性を越えた状態とは、「自我がないこと」であり、自己中心性から脱している。西谷によれば、「自己を空しくして他者をうつす」という自己の空（self-emptiness）の立場がなければ、真の共感は不可能なのである。J. B. カブは、京都学派の一人である阿部正雄とのダイアローグにおいて、仏教における共感の課題について指摘している。すなわち自己と他者との「無差別」が、本来特定の対象への愛着を打開する普遍性を志向するものかもしれないが、「無差別」は形而上学的であり、特定の相手や出来事への関心を妨げているという。たしかに「空」に基づく「自他不二」のような共感は、特定の他者への関わりを実践的・直接的に要請するものではないが、動物のように人間とは異なる他者への配慮の理論的根拠を成立させうるものだろう。すなわち、動物（および自然）と人間を区別する差異が、空のうちに解消されるため、動物への配慮を妨げるものは何もない。西谷の共感概念は、宗教哲学として、異なる視点で世界を見ることを可能にする。つまりここには、自分と他者との差異を根底から問い、自己中心性や人間中心主義を根底から否定する視座がある。

（４）感情に基づく動物倫理の研究

動物倫理の主流として、P. シンガーのように功利主義、また T. レーガンのように権利論に依拠する理論がある。これらはともに、動物への「正義 （justice)」にかなった関わり方を求めるものだと考えられるが、倫理学の潮流においては、正義理論の普遍性・絶対性に対し、個別性や文脈依存性を重視する方向性も見て取れる。動物倫理においても、1990 年代以降、フェミニズムの観点から動物へのケア倫理を提唱する立場がみられる。フェミニズム思想に依拠する動物倫理には、共感 （sympathy）やエンパシー（empathy)、憐れみ（compassion）といった人間の感情 （feeling, emotion）の動きに注目する点に共通する特徴がある。本研究では、これらの「感情」にどのような倫理学上の展望が見込めるかを精査した。動物権利論を提唱したレーガンは、フェミニストのケア倫理に関して、ケアとシンパシーの個人的経験を普遍化することに失敗していると批判している。しかし問題は、フェミ

ニストのケア倫理を動物倫理として導入することについて、レーガンが指摘するような「普遍化可能性」の不在や個別性が問題の本質なのではなく、フェミニストのケア倫理では「動物への配慮」や動物との連帯といった主要な要素も、文化依存的に捨象されてしまう可能性がある（すなわち文化によっては「動物への配慮」が考慮されない「フェミニストのケア倫理」というものがありうる）のではないかという点である。動物倫理との関係においても、欧米では密接な連関があった一方、日本のフェミニズム思想およびエコフェミニズムは、動物倫理の理論構築には寄与しなかったことが好例だが、フェミニズムと動物への配慮の結びつきには、必然性があるとはいえない。その点で、フェミニズム思想に基づく動物の声の代弁は、特に日本のフェミニズム思想の状況においては、共有可能性や必然性という要素で疑問が残る。しかしフェミニズム思想の立場の倫理的射程が狭い関心に限定されるとの批判も受けるものの、「ケア」の概念は、関係性を持つ個別の対象をいかに遇すべきか、個々の相手を正しく理解しようとする姿勢において考慮する、知的かつ情的な営みである。またケア倫理自体が個別の動物を超えて社会全体への広がりを持つこと、個人的なものと政治的なものは分けられないことを主張している点にも注目すべきである。

（5）キリスト教思想における動物倫理の研究

近年の哲学・倫理学において、動物に関する倫理的責任や配慮に関する考察は極めて隆盛となっている。一方キリスト教思想・神学においては、動物倫理への言及が不十分であり、人間にとっての内容に終始しているとの批判が従来あった。近年では神学の側からも、キリスト教教義が動物倫理について長らく沈黙してきたことが反省の言として述べられている。本研究では、殊に 2000 年以降、欧米圏で活況を呈している「動物神学（animal theology）」について精査した。動物への倫理的配慮がキリスト教思想において課題となったのは、哲学・倫理学よりやや遅れた 1990 年代である。1993 年に、スタンリー・ハワーワスやジョン・B. カブ Jr. など著名な神学者らが寄稿した論文集『動物にとっての福音か？』が刊行された。1994 年には、アンドリュー・リンゼイによる『動物神学』が刊行された。これらの神学においては、哲学や倫理学と共通し「動物への配慮は真剣に考察すべき事柄である」との見解が示されたが、神学ゆえの新たな課題となったのが「イマゴ・デイ」（神の像）の再解釈という問題である。人間と動物を平等な配慮の対象とみなすならば、「神にかたどって」つくられた人間は、動物とどのように異なっているのだろうか。創世記 1 章 26-27 節における「イマゴ・デイ」の記述が人間独自のあり方を示すこと自体は、現代キリスト教思想においても共通見解である。しかし再解釈の過程で、「イマゴ・デイ」としてつくられた人間は、他の被造物とは異なるものの、その違いが人間の優越を意味するものではないと理解されるようになった。キリスト教神学における支配的な伝統では、動物に優越する特別な存在として人間を捉えてきた側面がある。なかでも人間は動物にはない理性が与えられており、動物とは実体的に異なるものとみなす人間の「実体的な（substantial）理解」は、キリスト教思想における動物への道徳的配慮の妨げとなってきた。

一方、リンゼイやハワーワス等は「イマゴ・デイ」について、理性とは異なる観点から論じている。リンゼイによれば、「人間が神の似像につくられた」とは「人間が動物に仕える僕として定められている」ことを意味する。ここでの「イマゴ・デイ」は、自らを無化（ケノーシス）した神の姿を反映するものと捉えられている。

またハワーワスとバークマンによれば、人間と動物の違いは理性的能力の有無ではなく、人間が「独自の目的」をもって創造されたことにある。ハワーワスらの見解では、動物が彼ら自身の物語を生きることができるよう、人間は動物の代弁者となる役目を与えられている。現状の世界、すなわち人間が互いに争い、人間が動物を利用し、動物が動物を捕食する状態は創造の善性から堕落しており、「虚無」に服するあらゆる被造物は、終末における救済を必要としているという。人間には、終末における完成へ向けて、それにふさわしくなるよう、動物を含めた人間以外の被造物の状況を改善する役割が与えられている。

さらにライアン・P. マクラフリンは、「イマゴ・デイ」について、人間には理性的能力があるといった「実体的」な解釈ではなく、人間には固有のはたらきがあるという「機能的（functional）」な解釈をするべきだと主張している。またダニエル・K. ミラーは、「イマゴ・デイ」について、やはり何か人間が所有する能力に依拠させる「実体的」な解釈をするのではなく、神との関わりを持ちうる「関係的（relational）」なものとして解釈すべきだと述べている。これら現代のキリスト教神学者に共通するのは、「イマゴ・デイ」を他の被造物に優越する特質ではなく、人間だけに与えられた召命とみなす解釈である。キリスト教思想における人間と動物との差異とは、人間の優位性から生じるのではなく、人間に動物に対するより大きな責任があることに由来するという観点が重要であることを解明できた。

（6）動物倫理に関する国際共著の発刊

The Oxford Centre of Animal Ethics が開催した国際学会（2016 年 7 月。長年動物倫理に関する研究を行ってきたオクスフォード大学・マンスフィールドカレッジの A. リンゼイ名誉教授の主宰）において研究発表を行った際、親交を深めたアパラチア州立大学のキャロ

ル・クライン准教授とともに国際共著である *Tourism Experiences and Animal Consumption: Contested Values, Morality and Ethics* を Routledge 社より刊行した（2018 年 1 月）。担当した章では、日本における動物倫理の特性とその可能性について、「ツーリズム」が持つ思想的背景に言及しつつ論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 鬼頭葉子	４．巻 53
２．論文標題 個人から社会へ ― M．スロートにおける共感と社会正義の関わり ―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鬼頭葉子	４．巻 19
２．論文標題 『人間知性研究』におけるヒュームの宗教論 ―奇蹟および摂理に関する論考を中心に―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 宗教と倫理	６．最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鬼頭葉子	４．巻 19
２．論文標題 感情（emotion）からアプローチする動物倫理の可能性－フェミニズム、徳倫理学の限界と展開－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 豊田工業大学ディスカッションペーパー	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鬼頭葉子	４．巻 37
２．論文標題 田辺元『キリスト教の辯證』における終末論と社会的実践の連関についての考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教哲学研究	６．最初と最後の頁 82-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鬼頭葉子	4．巻 52
2．論文標題 シェーラーの『共感』概念とその宗教哲学的背景	5．発行年 2018年
3．雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鬼頭葉子	4．巻 2018年9月号
2．論文標題 生きることと食べること―現代キリスト教神学と動物倫理	5．発行年 2018年
3．雑誌名 福音と世界	6．最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鬼頭葉子	4．巻 37
2．論文標題 西谷啓治とパウル・ティリッヒの歴史理解―「空」と「カイロス」―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 基督教学研究	6．最初と最後の頁 25-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鬼頭葉子	4．巻 51
2．論文標題 「あわれみ」概念の思想史	5．発行年 2017年
3．雑誌名 長野工業高等専門学校紀要	6．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鬼頭葉子	４．巻 17
２．論文標題 宗教と倫理の関わり試論―ロヴィン、ティリッヒ、デリダを手掛かりに―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 宗教と倫理	６．最初と最後の頁 90-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 感情（emotion）からアプローチする動物倫理の可能性－フェミニズム、徳倫理学の限界と展開－　（ワークショップ『動物倫理の可能性』
３．学会等名 日本倫理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 感情と政治 ―共感概念の解明を手掛かりに―
３．学会等名 関西哲学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 動物に関する哲学・倫理学の現状および神学の可能性
３．学会等名 「エコロジカル聖書解釈」研究会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 動物に対する正義は可能か？
３．学会等名 日本法哲学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 共感・価値・信念－M.C.ヌスバウムの政治哲学における「共感（compassion）」概念と形而上学との接点－
３．学会等名 同志社大学文学部哲学科科研費コロキウム（招待講演）
４．発表年 2018年～2019年

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 宗教と倫理のかかわり－「憐れみ（compassion）」概念を手掛かりに
３．学会等名 宗教倫理学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鬼頭葉子
２．発表標題 ヌスバウムのあわれみ概念について
３．学会等名 日本倫理学会第68回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yoko Kito
２．発表標題 Keiji Nishitani's "Non-Duality of Self and Other"
３．学会等名 Fourth Minding Animals Conference (Mexico City)（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 鬼頭葉子	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 201
３．書名 技術の倫理－技術を通して社会がみえる	

１．著者名 Carol Kline (ed.) Yoko Kito	４．発行年 2018年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 236
３．書名 Tourism Experiences and Animal Consumption: Contested Values, Morality and Ethics (Routledge Research in the Ethics of Tourism Series)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関